

# デューイにとってのエマソンの魅力

## —「探究」(inquiry)の礎としての「自己修養」(self-culture)—

山本孝司

### はじめに

デューイの思想形成に影響した人物としてエマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) をとりあげたい。エマソンといえば、「コンコードの聖人」(the Concord Sage) の異名をもち、19世紀ニューイングランド超越主義 (New England Transcendentalism) のリーダーとして知られる。アメリカにおいてエマソンは、知的ヒーロー像の典型である。アメリカ人は大概エマソンが好きと言っても過言ではない。

さて、本論のテーマとなるデューイ思想形成へのエマソンの影響についてであるが、デューイ自身が認めるように、ドイツ観念論哲学からの影響は、ヘーゲルの存在が大きいと言える。他方で、これもデューイ本人が、しばしば彼の著書でエマソンに言及することで、ドイツ観念論哲学の垂流としてのニューイングランド超越主義者たちの存在も影響関係として認められるところである。

デューイは、ロマン主義的子ども観に立ったフレーベルの教育原理に対しては手厳しい批判を浴びせたことで知られるが、彼の著作におけるエマソンの扱い方から、デューイがエマソンのロマン主義については好意的に捉えていたことがうかがえる。要するにデューイが嫌った非論理なことを言う思想家の中でもエマソンは特別扱いであった。

それでは、なぜデューイはエマソンを特別扱いしたのであろうか。アメリカ人は大概エマソンが好きという理由以外に説得力をもつ理由をあげるとするなら、それはまさにデューイの「探求」理論の真なることを、エマソンがまさに先行して説いてくれていたことにある。それはエマソンの言説を通してはもちろんのこと、彼の生き様そのものを通してデューイに示されていたということが出来る。それは一言でいうならば「自恃」(self reliance) であり、この態度に貫かれた「自己修養」(self-culture) である。

---

Takashi Yamamoto (岡山県立大学教授)

本論文は第1回世界市民教育シンポジウム「学びを生活に取り戻す——世界市民とジョン・デューイ」(2022年10月22日、於・創価大学)のセッション「デューイの思想形成——日本のデューイ研究の視点から」における発表原稿である。これは行安茂編著『デューイの思想形成と経験の成長過程』北樹出版、2022年の第1部第2章に掲載の拙稿「デューイにとってのエマソンの魅力—「探究」(inquiry)の礎としての「自己修養」(self-culture)」を基にしている。

## 1. 「民主主義の哲学者」

### (1) 「考える人間」

エマソンは、「コンコルドの聖人」とは別に「民主主義の哲学者」(the Philosopher of Democracy) の異名をもっている。エマソン自身は「民主主義」を中心テーマに論じることはしていないが、彼の思想に「民主主義」という文字が冠されることには重要な意味がある。

後年「アメリカの知的独立宣言」(intellectual Declaration of Independence) として受け取られることになる「アメリカの学者」(The American Scholar, 1837) において彼は、テーマの中心をアメリカに置きながら、アメリカの自由や民主主義について論じることをしないことによって、アメリカの歴史的な文脈からの独立を印象づけている。この中でエマソンは、「考える人間」(Man thinking) というキーワードをあげている。

「考える人間」は、おのれの道具によって服従させられたりしてはならない。書物は学者のひまな時間のためにあるのだ。神を直接読むことができるときには、その時間は、他人がそれぞれの読みとり方を書き写したものに浪費するにはあまりにも貴重すぎる<sup>1</sup>。

この「考える人間」の対極にエマソンが位置づけているのが「本の虫」(bookworm) である。エマソンは、思想において自己信頼を欠き、過去の因習に隷属し、行動を伴わない態度を軽蔑していた。知識人を中心に自己信頼が備わり、それが社会全体に広がっていくことにより、個人が集団に埋没することなく、個人として尊重される社会が実現するとの展望を彼は表明した。こうした彼の社会観は、当時のアメリカのみならず今日民主主義を標榜する社会に共有されているといっていよう。

わたしたちの時代のもうひとつの兆は、これまた類似した政治上の運動のおかげで誰の目にも明らかなものになっているが、個人というものをあらためて重視しようとする動きである。個人を周囲から引きはなして、——それぞれに世界が自分のものだと感じ、人間同士が独立国家同士のようにおたがいに遇し合うようになることを意図して、個人のまわりに人間天与の権利である尊敬の防壁をめぐらすことに役立つことなら、すべて

---

<sup>1</sup> Emerson, R. W., "The American Scholar," *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, vol. I*, Boston & New York, Houghton Mifflin, 1903-1904, pp.88-91 (エマソン (酒本雅之訳) 「アメリカの学者」『エマソン論文集 上』岩波文庫、1972年、pp.120-124.) (原文) Man Thinking must not be subdued by his instruments. Books are for the scholar's idle times. When he can read God directly, the hour is too precious to be wasted in other men's transcripts of their readings.

偉大さのみならず、本当の連帯にも役立つ<sup>2</sup>。

エマソンの社会観においてはこのように個人が強調されているが、周囲から引きはなされた個人がいかにして他者と連帯し、社会を形作っていくかについては、まさに彼の超越主義思想の中核となる「理性」概念に関係している。個人が周囲から切りはなされるといっても、独我論的な意味での他者不在の社会観ではない。そこで求められる自己信頼も単に我を通すこととは異なっていた。

こうした社会観に立つエマソンの企図した社会の変革は、個人の道徳的陶冶による人格的改良を通した個人主義的社会改革であった。この場合も、個人の自己完結した改良ではなく、他者とのつながりをもちながら社会的な存在としての個人による人格的改良を意味していた。

## (2) 個人の精神に流れる「大いなる理性」(「大霊」)

ところで、民主主義はいかにして可能かという問いに対して、エマソンの回答はシンプルである。それは「理性」(Reason)(別名「大霊」(Over-Soul))によって人々が結ばれることを通して持ち得る「直観」(Intuition)によって誰もが徳性を帯びた世界認識が可能であることによる。理性と聞くと、一般にわれわれは、それをいかに高次に位置づけるにしても、近代哲学でいうところの認識能力の一つに限定しがちである。あるいはもっと俗っぽく言うと、感性や感情を統御する力として捉えがちである。ここにいうエマソンの「理性」は、こうした捉え方よりももっと多面的で多角的な概念である。彼は言う。

万人の個別的な存在をことごとく内部にふくみ、ほかのすべての存在と一体にしてしまうあの「一なる者」、あの「大霊」だ。誠実な会話ならすべて礼拝を捧げ、正しい行為ならすべて服従を捧げるあの共通の心だ<sup>3</sup>。

<sup>2</sup> *Ibid.*, p.113 (同上書、pp.146-147.)

(原文) Another sign of our times, also marked by an analogous political movement, is the new importance given to the single person. Everything that tends to insulate the individual—to surround him with barriers of natural respect, so that each man shall feel the world is his, and man shall treat with man as a sovereign state with a sovereign state—tends to true union as well as greatness.

<sup>3</sup> Emerson, R. W., "The Over-Soul," *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, vol.2*, Boston & New York, Houghton Mifflin, 1903-1904, p.269 (エマソン(酒本雅之訳)「大霊」『エマソン論文集 下』岩波文庫、1972年、pp.10-11.)

(原文) ……that Unity, that Over-soul, within which every man's particular being is contained and made one with all other; that common heart, of which all sincere conversation is the worship, to which all right action is submission; that overpowering reality which confutes our tricks and talents, and constrains every one to pass for what he is, and to speak from his character, and not from his tongue, and which evermore tends to pass into our thought and hand, and become wisdom, and virtue, and power, and beauty. We live in succession, in division, in parts, in particles.

エマソンに限らず、超越主義者たちの自然観・世界観は、神の精神によって人間を含むあらゆる事物事象が包摂されているという観念によって説明されるが、こうした自然や世界はキリスト教でいう神によって創造された自然や世界とも異なっていた。19世紀のアメリカでは、基本的には神と人間との関係は分離された状態にあった。神と人間に限らず、主客「不分離」であることが、エマソンの思想の大きな特徴である。

## 2. 講壇哲学への批判と生き方の哲学

エマソンの「哲学」観が鮮明に現れているのは、「代表的人間像」(Representative men, 1850) 中のプラトン論である。「サクソン人もローマ人も、プラトンが立てた範疇に、ほんのすこしの思想さえつけ加えることができなかつた以上、人類の光栄であるだけではなく恥辱でもあるのだ。妻も子供も彼にはなく、あらゆる文明国の思想家たちが彼の子孫であり、彼の精神に彩られている」としつつ、「プラトンすなわち哲学であり、哲学すなわちプラトンなのだ」と断言する<sup>4</sup>。エマソンがプラトンを哲学者とみなしたのは、プラトンが「哲学に生きる人」であったがためであり、彼の生きる姿勢ゆえのことであった。エマソンがプラトンの中にみたのは、一方において理想である「精神の法則」、他方において運命である「自然の秩序」の探求方法であり、前者は「一者」、後者は「多様性」を希求する姿勢が取られる。「プラトンは限界を愛しながらも、また一方では限りないものを愛し、真理そのものや善そのものから生まれる大らかさやけだかさを理解し、そしてまるで人間の知性を代表するかのように、この限りないものにたいして十二分な敬意を払い、——この広大な霊がうけるのにふさわしく、人間の知性がはらうのにふさわしい敬意を、断乎として示そうとつとめたのである」<sup>5</sup>。そしてこのようなプラトンの知的探求方法によって形作られる世界認識の特徴としてエマソンがもっとも肯定的に強調しているのが体系のなさであった。エマソンは言う。「彼は宇宙の理論をこころざしたが、その成果は完全でもなく自明でもない。……その世界についての理論は、つぎはぎだらけの代物なのだ」<sup>6</sup>と。

---

<sup>4</sup> Emerson, R. W., "Representative Man," *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, vol.4*, Boston & New York, Houghton Mifflin, 1903-1904, p.40 (エマソン (酒本雅之訳) 『エマソン選集 6 代表的人間像』 日本教文者、2014年、pp.4-5.)

(原文) Plato is philosophy, and philosophy, Plato……

<sup>5</sup> *Ibid.*, p.67 (同上書、p.31.)

(原文) Plato, lover of limits, loved the illimitable, saw the enlargement and nobility which come from truth itself and good itself, and attempted as if on the part of the human intellect, once for all to do it adequate homage,- homage fit for the immense soul to receive, and yet homage becoming the intellect to render.

<sup>6</sup> *Ibid.*, p.76 (同上書、p.40.)

(原文) He attempted a theory of the universe, and his theory is not complete or self-evident. One man thinks he means this, and another that; he has said one thing in one place, and the reverse of it in another place. He is charged with having failed to make the transition from ideas to matter. Here is the world, sound as a nut, perfect, not the smallest piece of chaos left, never a stitch nor an end, not a mark of haste, or botching, or second thought; but the theory of the world is a thing of shreds and patches.

エマソン自身が「一貫性は小心者に宿るお化け」<sup>7</sup>と述べるように、彼の講話や文章も一貫性はなく「論理的」という意味では、わかりにくい内容である。彼の随筆に関しても、読んだ人は誰も彼の文章の論理の飛躍にうんざりさせられることしばしばであるが、こうしたことを差し引いてもなお、彼の言葉の真实性をわれわれは内心において認めることができよう。

現実世界を元にして構成される論理の世界は、個人の中で構成された現実世界の一部でしかない。また他者との論理の共有は、言語として記号化されることで可能となる。言語は個人の中で構成された現実世界（経験）の全てを表現するわけではないので、言語によって表現された論理は個人の中での現実世界（経験）の一部に過ぎない。

生活こそわたしたちの辞書である。田舎で働いても、町にいても、商売や製造の真髄を洞察しても、多くの男たち女たちと率直に交際しても、科学に、芸術にたずさわっていても、けっして時間の無駄づかいではない。それらのものが提供してくれるあらゆる事実によって、わたしたちの知覚を例証し具象化するための言葉を習得するといったひとつの目的に、すべてちゃんとかなっているからである<sup>8</sup>。

生活を基盤にした思考は、常に行為と結びつく。それは大学や書物によって占められた学問の世界を越境する。エマソンは行為の中での思考を奨励することで、「知」を生活者としてのすべての人々に開放し、また生活の場で共有される「知」をこそ尊重したのである。

われわれは、生活に関する自分の理論や、自分の宗教や、自分の哲学をもっている。それぞれ瞬時の出来事、すなわちにわか雨、蒸気船の遭難、立派な容貌をした人が通り過ぎゆくこと、わが隣人の卒中、それらすべては、われわれがもっている生活の理論をためすテストであり、われわれが真理とよぶところのものまさに正確な結果であり、しかもその結果の欠点をも明らかに示しているのである。もし私が真理の探究を放棄し、ある虚偽の教義の港に入港したならば、またある新しいあるいは古い教会の教義に、あるいはシェリングあるいはクーザンの思想の港に入港したならば、時々刻々生活の多様性につけ加えられる豊穡な時の生みだす新たな出来事を、私はまったく利用しなくな

<sup>7</sup> Emerson, R. W., "Self-Reliance," *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, vol.2*, Boston & New York, Houghton Mifflin, 1903-1904, p.57 (エマソン (酒本訳)「自己信頼」『エマソン論文集 上』、p.205.) (原文) A foolish consistency is the hobgoblin of little minds……

<sup>8</sup> Emerson, R. W., "The American Scholar," *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, vol.1*, p.87 (エマソン (酒本訳)「アメリカの学者」『エマソン論文集 上』、pp.130-131.) (原文) Life is our dictionary. Years are well spent in country labors; in town; in the insight into trades and manufactures; in frank intercourse with many men and women; in science; in art; to the one end of mastering in all their facts a language by which to illustrate and embody our perceptions.

るのである<sup>9</sup>。

生活に関する自分の理論、自分の信念に従った生き方を大切にせよとのエマソンによるこうした教示は、彼の教育言説にもつながる。

### 3. 「学ぶこと」と「生きること」の一致

エマソンの文字通りの教育観が示されているのが、『教育論』(Education, 1876)においてである。

我々自身の経験からして、教育の秘訣は、生徒を尊重することにある、ということが教えられるべきことを私は信ずる。・・・(中略)・・・ひとり生徒のみが、みずからの教育に対する秘訣の鍵を握っているのである。あなた方おとなが、余計な手出しで干渉し妨害し、あまりにも支配しすぎると、生徒は自己の目的の達成を妨げられ、生徒は自分自身を見失いかねないのである。子どもを尊重せよ<sup>10</sup>。

これは教育場面における学習者の経験に拠って立つ理論的根拠になる。先人たちの経験を体系化し系統的に効率よく子どもたちに伝えることは、近代学校制度確立期にとりわけ初等教育において請け負われた使命であった。19世紀後半には当時の主要な国々で、古代以来、限られた階層の子弟のみに開かれていた学校から、義務教育という形で全民就学が実現し、近代学校では「画一的内容」の「一斉教授」という教育方法の刷新につながった。こうした制度に対しては、19世紀末に「新教育」の立場から世界各国で批判の運動が生じた。アメリカにおいてはデューイが旗手となった進歩主義教育運動として展開するのであるが、エマソンは、教育史においては、進歩主義教育の思想的源流に位置づけられる。

人類の長い歴史の中で先人たちの蓄積してきた経験としての文化遺産に敬意を払い、それらを学ぶことは大切である。個人に与えられた人生の中で、先人の経験の全てを直接経験することは

<sup>9</sup> Emerson, R. W., "Education," *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, vol.10*, Boston & New York, Houghton Mifflin, 1903-1904, pp.132-133. (エマソン (市村尚久訳) 『人間教育論』、明治図書、1971年、pp.15-16.) (原文) We have our theory of life, our religion, our philosophy; and the event of each moment, the shower, the steamboat disaster the passing of a beautiful face, the apoplexy of our neighbor, are all tests to try our theory, the approximate result we call truth, and reveal its defects. If I have renounced the search of truth, if I have come into the port of some pretending dogmatism, some new church or old church, some Schelling or Cousin, I have died to all use of these new events that are born out of prolific time into multitude of life every hour. I am as a bankrupt to whom brilliant opportunities offer in vain.

<sup>10</sup> *Ibid.*, pp.143-144 (同上書、pp.24-25.)

(原文) I believe that our own experience instructs us that the secret of Education lies in respecting the pupil. It is not for you to choose what he shall know, what he shall do. It is chosen and foreordained, and he only holds the key to his own secret. By your tampering and thwarting and too much governing he may be hindered from his end and kept out of his own. Respect the child. Wait and see the new product of Nature. Nature loves analogies, but not repetitions. Respect the child. Be not too much his parent. Trespass not on his solitude.

時間的にも空間的にも不可能である。だから教師は子どもにとって有用で本質的な経験を配列した「ミニマム・エッセンシャルズ」として効率よく教える必要も生じる。

「自然を精神の象徴」と捉えるエマソンの自然観も、外的自然を自らの精神を用いて究明する姿勢の要請であり、対象に対して全身全霊で真摯に向き合うことを通して、自らの実感を伴う認識として精神内に表象される様とも言えまいか。自らの自然認識に真実性が付与されるのは、神によって人間と自然とが包摂されるというレトリックを超越主義者はとるが、その真意は、真実性が「神」というマジックワードによって受動的に付与されるということではなく、むしろ自らの認識が真実なることが神域に至るまで主体的能動的な努力が求められるということである。こうした認識はもちろん、自分以外の誰かからの借り物の知識によっては成立しないし、経験が捨象された記号の世界だけでは獲得できないものである。このような意味で、記号によって示される論理よりも、エマソンは現実感覚としての自らの直観（直感）の優位性を認める。

自然が魂の対極であり、どの部分をくらべてみても、きちんと魂に合致していることが分かるようになります。いっぽうが印形で、もういっぽうが押印の跡です。…(中略)…結局、「汝自身を知れ」という古代の教えと、「自然を研究せよ」という近代の教えとは、最後にはひとつの金言となってしまいます<sup>11</sup>。

エマソンのこの発言は、個人の内面の精神が外なる自然に反映されるという詩人のもつ直観(直感)を称揚するロマン主義的解釈も可能であるが、引用の最後の部分にある「汝自身を知れ」と「自然を研究せよ」との等置は、学校教育における理論に落とし込んでみると、自分を知ることを通して、自己との関係で外界の事物事象を捉えることが可能となる問題解決学習の出発点となるテーゼである。自分自身の状況についてつきつめて考え、自分にとって本質的で有用な知識を記号としての間接経験の暗記ではなく、直接経験として自然を研究する中で獲得していくことの重要性については近代以降教育学の中で繰り返し唱えられてきたし、デューイに代表されるアメリカ進歩主義教育はこの種の方法原理の代表格である。

#### 4. プラグマティズムの前提としての私の人生肯定

さて上に見てきたようなエマソンの自分を拠り所にした世界認識の方法は、しばしばプラグマティズムの源流に位置づけられてきた。プラグマティズムにおける認識対象との主体的関わり方

<sup>11</sup> Emerson, R. W., "The American Scholar," *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, vol.1*, pp.97-98 (エマソン (酒本訳)「アメリカの学者」『エマソン論文集 上』、p.119.)

(原文) He shall see that nature is the opposite of the soul, answering to it part for part. One is seal and one is print. Its beauty is the beauty of his own mind. Its laws are the laws of his own mind. Nature then becomes to him the measure of his attainments. So much of nature as he is ignorant of, so much of his own mind does he not yet possess. And, in fine, the ancient precept, "Know thyself," and the modern precept, "Study nature," become at last one maxim.

である探求と超越主義者エマソンの自己信頼の思想との親和性があるが、それを持って源流に位置づけるには説明不足の感が残る。プラグマティズムの探究の持つ「暫定的真理」という態度とエマソンの自己信頼の思想とのつながりが見えないからである。自己信頼による対象との主体的関わりの時間軸に関わる問題である。

自由は必然的なものだ。もしも「運命」の側に立ち、「運命」こそすべてだと言いたい人がいるなら、それに対してわれわれは、「運命」の一部が人間の自由なのだという。選択し行動しようとする衝動は、魂のなかに滾々とわきつづけ、永遠に涸れることがない。「知性」は「運命」を無効にする。人間は考えるかぎり自由なのだ。……人間にとっては、「運命」にではなく、反対の方向に目を向けることが健全なのであり、現実的な見方とはその反対方向のことだ。身のまわりの事実に対する人間のまともな関係とは、事実へつらうことではなく、事実を利用し思いのまま支配することだ<sup>12</sup>。

ここに示されるエマソンの事実に対する構えは、能動的であり、開拓的であり、時間軸としてみたときには、可変的であり偶然の入り込む余地があり、彼の表現からはむしろ偶然という不確定を楽しむむきがかがえる。世界は動的で常に現在進行形で変幻自在な対象であり、それにかかわる認識主体としての人間にもまたダイナミックさが求められる。

あらかじめ他者によって踏みならされた道を選択して進むのも一つの選択ではある。しかし、それは同時に因習に捕らわれることでもあり、1830年代からエマソンは繰り返し、自分の頭で考え、自分の足で立ち、歩むことでアメリカが精神的にもヨーロッパから独立しなければならないことを説いた。南北戦争を挟んだ時期は、政治経済においても変革期であり、当時「進歩」という楽観的思想に支えられてはいたものの、現在と将来にわたる変化を予測するには困難な状況が続いた。そこでは、人生の持みとなるコンパスは、他者から与えられる出来合いのものではなく、状況に応じて環境とのかかわりの中で臨機応変に自らの行動決定できる磁石が求められた。エマソンの思想は、そんな時代に登場した「自己信頼教」と呼ぶべき、ある種の福音であった。

---

<sup>12</sup> Emerson, R. W., *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, vol.9*, Boston & New York, Houghton Mifflin, 1903-1904, p.23 (エマソン (酒本雅之訳)「運命」『エマソン論文集 下』、pp.205-206.)

(原文) Nor can he blink the freewill. To hazard the contradiction, -freedom is necessary. If you please to plant yourself on the side of Fate, and say, Fate is all; then we say, a part of Fate is the freedom of man. Forever wells up the impulse of choosing and acting in the soul. Intellect annuls Fate. So far as a man thinks, he is free. And though nothing is more disgusting than the crowing about liberty by slaves, as most men are, and the flippant mistaking for freedom of some paper preamble like a "Declaration of Independence," or the statute right to vote, by those who have never dared to think or to act, yet it is wholesome to man to look not at Fate, but the other way; the practical view is the other. His sound relation to these facts is to use and command, not to cringe to them.



## おわりに——「探究」の出発となる確かな自己

ここまでエマソンの認識方法と教育思想がプラグマティズムと進歩主義教育理論の源流として位置づけられる所以について、市井の哲学者としてのエマソンの「知」のあり方を中心に論じてきたが、デューイとの関わりで依然として「なぜエマソンなのか」という問いが残る。

デューイは『人間性と行為』(Human Nature and Conduct: An Introduction to Social Psychology, 1922)の中で、エマソン評とからめつつ、めずらしくロマン主義に対する好意的評価を述べている。「……われわれはまた、一貫性がわれわれと現在の生活機会の間にあって邪魔になるときは、それは風に吹き飛ばされるべきだとするエマソンの勇氣にも、ひそかな共感を抱いている。われわれは、不変性の理念とは正反対の極を得ようと手を伸ばすのであり、また、自然に帰るといふ装いのもとに、ロマン的自由を夢見る。そして、この反対の極では、すべての生命が、衝動にたいして、すなわち、即興的自発性と新奇な靈感の継続的源泉にたいして、可塑的なのである。われわれは、すべての組織化とすべての安定性に反逆する。」<sup>13</sup>

生活の中にあっては思考・行為の評価の基準は、自己統御された思考・行為の適切性にある。その時々状況における対象との関係で自己把握を行い、自己を支配することが、デューイ式探究の理論であるとする、エマソンが求めた自己信頼に基づく自己修養によって築かれるしっかりとした自己は、思考・行為主体としての生活者の基盤である。探究の出発点となる自己と環境との間の問題状況としての調和を失った不確かな状況の認識は、一方において確かな自己の足場がないとそもそも成り立たない。このような意味合いで、エマソンの自己信頼に基づく自己修養は、デューイの「探求」を成り立たせる要でもあった。

こうしてみるとデューイは、これまでしばしば指摘されてきたように、子どもを尊重する理由を詩人としてのエマソンのロマン主義的表現に求めただけでなく、「探求」理論のプロトタイプを、エマソンの教育観にみており、デューイにとってエマソンは現実の教育実践を導く理論家であったとの解釈も可能であろう。

<sup>13</sup> Dewey, J., *Human Nature and Conduct: An Introduction to Social Psychology*, New York, Henry Holt & Co., 1922, p.100. (デューイ (河村望訳) 『人間性と行為』、人間の科学新社、1995年、p.105.)

(原文) But we also have a sneaking sympathy for the courage of an Emerson in declaring that consistency should be thrown to the winds when it stands between us and the opportunities of present life. We reach out to the opposite extreme of our ideal of fixity, and under the guise of a return to nature dream of a romantic freedom, in which all life is plastic to impulse, a continual source of improvised spontaneities and novel inspirations. We rebel against all organization and all stability.